

竹取物語 和訳！

むかしむかし、竹取の翁という者がいた。野山にわけ入っては竹を取っては、色々なことに使った。名前を、讃岐の造と言った。その竹の中に、根本の光る一本の竹があった。不思議に思って、寄って見ると、竹筒の中が光っている。それを見ると、三寸(約9 cm)ほどの人が、たいそうかわいらしい様子で座っている。翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらっしゃるのでわかった。子になられるべき人であるようだ。」と言って、手のひらの中にいれて、家へ持って帰った。妻の老女に預けて育てさせる。かわいらしいことは、この上ない。たいそう幼くて体が小さいので、籠に入れて育てる。

竹取の翁が、竹を取ると、この子を見つけてから後に竹を取ると、節と節を隔てて、節と節の間ごとに黄金のある竹を見つけることが度重なっ

た。このようにして翁は、（だんだん）裕福になってゆく。

この児は、育てるうちにぐんぐんと大きく成長していく。三ヶ月ほどになるころに、一人前の大きさの人になったので、（翁は）髪上げなどとかくして（この子の）髪を結い上げさせ、裳を着せる。帳台の内からも出さず、大切に育てる。この子の容貌の美しいことは世に類がなく、家屋の中は暗いところもなく光が満ちている。翁は、気分が悪く、苦しい時も、この子を見ると、苦しいこともなくなってしまった。腹立たしいことも、心が鎮まった。翁は、竹を取ることが長く続いた。^{経済的に豊かな}勢いが盛んな者になったのだった。この子

がとても大きくなったので、名前を、^{みむろどいんべ}御室戸齋部の秋田を呼んでつけさせる。秋田は、なよ竹のかぐや姫と命名した。このとき、三日間、宴を開いて管弦の遊びをする。あらゆる音楽の演奏をし

た。男は分け隔てせずに呼び集めて、たいそう盛大に管弦の遊びをする。世の中の男たちは、身分が高い者も、身分が低い者も、「なんとかして、このかぐや姫を妻としたいものだ、結婚したいものだ。」と、噂に聞き、いとしく思って心を乱す。そのあたりの垣根にも、家の門にも、いる人でさえ容易に見ることができそうもないのに。夜は安らかに眠ることもできず、闇の夜に出かけても、穴をあけ、のぞき見をして、みなが心を乱している。